

## 要旨

現在まで、多数の研究者の関心が対人魅力の規定要因をめぐる問題に対して寄せられており、様々な理論が展開されている。本文は、「他者への共感不全性」という概念を導入し、2つの研究を行い、それが態度の類似性と魅力の関わりに影響するのか、特に非類似の他者への魅力に注目して検討する。

まずは、研究1としては、先行研究の結果を踏まえて、類似の他者への好意は、共感不全性が高いほど好意が下がり、非類似の人に対する好意に関しては、共感不全の程度と好意度は無関係であると推測している。

仮説を検証するため、103名中国出身の大学生(男性48名、女性55名)を対象としてインターネットで質問のURLを配布して行った。質問項目はのセクションに分かれており、すべての項目を中国語に翻訳した。調査の最初の2項目は年齢と性別の質問であった。次の7項目は、廣澤ら(2018)が提唱した性格要因の1つである「他者への共感不全」の程度を問う尺度から、下位尺度である共感不全性を測定する7項目を用い、被験者の共感不全性の程度を測定した。最後の6つの項目は、好意度を測定するためのものである。Byrne(1971)が対人魅力を測定するために用いた項目を参考にして作成した。

その結果、共感不全性と非類似他者への好意度の間のみ負の相関関係( $r = -.37$ ,  $p < .01$ )が見られ、共感不全性と類似他者への好意度の間は有意ではなかった( $r = .10$ , n.s.)。共感不全性が高いほど非類似の他者に対する好意度は低いという結果が得られた。

研究1の考察としては、類似の他者への好意は共感不全性の程度と相関はないので、Byrne(1969)の強化論に基づくByrne(1961,1973)の「類似性魅力」仮説を支持していない。しかし、強化論の観点とRosenbaum(1986)の「非類似性嫌悪」仮説を組み合わせて考えてみれば、共感不全性が高い人は他者の視点を共感しにくく、矛盾や不均衡による嫌悪感が生じたら、否定的な影響が強まり、非類

似の他者への魅力も共感不全性が低い人より低くなると解釈することができる。また、調査用紙の不足点についての改善方法を検討した。

そして、研究2は、Rosenbaum(1986)とByrne(1961, 1973)の仮説を検証した。被験者が実際の人物がある程度は想起でき、よりリアリティがある方法を使用した。

研究1の実験方法を改善したうえで、研究2の実験方法としては、1週目の実験は大学の授業中に質問紙を配布して行った。質問紙は3つのセクションに分かれており、26の質問から構成されていた。調査の最初には田島(2000)の実験方法の中に態度がはっきり区別できる8項目の態度調査を設置した。次に、周囲の他者との類似性を測定するため、同じ8項目について、教室にいる人たちの平均的な態度を予想して回答することを求めた。次の7項目は研究1と同じように共感不全性を測定する7項目であった。最後の3項目は性別、年齢座席番号の質問であった。2週目は高類似者(類似度75%)と非類似者(類似度25%)という2つの刺激人物の答えを用意して、その刺激人物への好意度についての4つの質問を回答してもらった。最後の質問では、2人の刺激人物の答えが自分とどの程度類似していたかを被験者自身から判断してもらった。

その結果、全体としては、高類似者と非類似者の道具的好意得点の差と共感不全性得点の間に弱い負の傾向があり( $r = -.21, p < .10$ )。共感不全性得点が高ければ、類似者と非類似者への好意感情の差が小さくなる傾向があると示している。男性の場合には、高類似者好意度得点と非類似者好意度得点の差と共感不全性得点の間には負の相関関係があった( $r = -.49, p < .01$ )。そして、高類似者道具的好意得点と非類似者道具的好意得点の差と共感不全性得点の間にも負の相関関係があった( $r = -.57, p < .01$ )。女性の共感不全性得点と高類似者好意得点( $r = -.074, n. s.$ )、または非類似者好意得点( $r = -.054, n. s.$ )とも相関関係がなかった。

共感不全性が高いほど、自分と高類似者への好意感情が低くなる傾向があった。ここは、研究 1 の仮説と同じであり、Byrne(1969)の強化論とByrne(1961, 1973)「類似性魅力仮説」を利用して解釈する。共感不全性が高い個人は、他者の視点から問題を理解する能力や当該状態をうまく把握する能力が低く、他者の意見の妥当性について考えにくいため、他人の賞賛や承認から満足感を得られないことが予測される。また、共感不全性が高いほど、自分と非類似者への好意感情が高くなる傾向がある理由としては、Rosenbaum(1986)の仮説が当てはまると思われる。共感不全性が高い人、非類似から生じる不快な気持ちや嫌悪感が生じにくいので、相対的に好意が高まると考える。

研究 2 の結果から見ると、今回男性は、共感不全性得点が高ければ、高類似者への道具的好意得点が低くなる傾向がある、非類似者への道具的好意得点が高くなることが認められた。それは男性は他者が自分の生活にポジティブな影響を与えると最初に考えている、人間関係づくりの際に、自分にとって有益な関係を最初に選択するかもしれない。研究 2 の実験方法は、研究 1 より信頼性が高いが、実験参加者の人数(特に男性)が少なく、実験結果に影響があるかどうかをまた再検討する必要があると考える。また、座席番号の設置と 2 週間間に回答してもらった質問項目の数量は被験者に負担になるので、有償の実験または問題を減らした方が良いだろう。

研究全体から見ると、研究 1 と研究 2 の非類似者への好意の結果が逆になる理由を考えると、まずは、2 つの研究の実験方法が違う。また、Byrne(1973)の実験項目は、今の時代にふさわしいかどうかを検討する必要がある。最後は、研究 1 と 2 の対象者の国籍として、日中文化の違いも実験結果に影響を与えるかもしれない。